

# 雪の夜

野村胡堂

一

錢形平次が門口の雪をせっせと払っていると、犬つころのよう  
に雪を蹴上げて飛んで来たのはガラツ八の八五郎でした。

「親分、お早よう」

「何んだ、八か。大層あわてているじゃないか」

「あわてるわけじゃないが、初雪が五寸も積つちや、ジツとして  
いる気になりませんよ。雪見と洒落しやれようじゃありませんか」

そう言う八五郎は、頬冠りに薄寒そんな擬い唐棧まがとうざんの袷、尻を

高々と端折って、高い足駄を踏み鳴らしておりました。雪はすっかり霽はれて、一天の紺碧こんぺき、少し高くなつた冬の朝陽が、真つ白な屋根の波をキラキラと照らす風情は、寒さを気にしなければ、全く飛出さずにはいられない朝でした。

「たいそう風流なことを言うが、小遣でもふんだんにあるのか」  
「その方は相変らずなんで」

「心細い野郎だな。空ツ尻けつで顫えに行こうなんて、よくねえ量見だぞ」

「へッへッ」

「いやな笑いようだな、雪見に行こうてエ場所はどこだ」

「山谷ですよ」

「山谷？」

「山谷の東禅寺横で」  
とうぜんじ

「向島とか、湯島とか、明神様の境内なら解っているが、墓と寺だらけな山谷へ雪を見に行く奴はあるめえ、——そんなことを言つて、また誘い出す気なんだろう」  
さそ

「凶星ツ、さすがに銭形の親分、エライ」

八五郎はポンと横手を打ったりするのです。

「馬鹿野郎、人様が見て笑つてるじゃないか。往来へ向いて手な

んか叩いて」

「実はね親分、山谷の寮に不思議な殺しがあったんで」

「あの辺のことなら、三輪の兄あにい哥いに任せて置くがいい」

「任せちゃ置けねえことがあるんですよ。殺されたのは吉原の佐野喜の主人弥八ですがね」

「あ、因いんじゆう業ぎゆう佐野喜の親爺か、この春の火事で、女を三人も焼き殺した楼うちだ。下手人が多過ぎて困るんだろう」

「多過ぎるなら文句はねエが、三輪の親分は、たった一人よ選りに選たんぼって田圃たんぼの勝太郎を挙げて行きましたよ」

「えッ」

田圃の勝太郎は、まだ二十七八の若い男で、もとは八五郎の下っ引をしていたのを、手に職があるのに、岡っ引志願でもあるまいと、今から二年前、平次が仲間に奉加帳ほうがちようを廻して足を洗わせ、田圃の髪結床かみゆいどこの株を買って、妹のお糸くめと二人でささやかに世帯を  
持っていたのでした。

「妹のお糸が飛んで来て、けさ三輪の親分が踏込んで、兄さんを縛って行ったが、兄がゆうべ一と足も外へ出なかつたことは、一つ屋根の下に寝ていたこの私がよく知っている。夫婦約束までした嬉し野が焼け死んでから、兄さんはひどく佐野喜の主人夫婦を怨うらんではいたが、そんなことで人なんか殺す兄さんでないことは、

八五郎さんもよく知っていないさるでしょう。銭形の親分さんにもお願いしてどうぞ兄さんを助けて下さい——とこう言う頼みなんで」

「何んだ、そんなことなら早くそう言やいいのに」

「それに三輪の親分だが、——殺しが知れてから半刻経たないうちに下手人げしゅにんを挙げたのは、自分ながら鮮あざやかな手際だったよ。銭形が聴いたらさぞ口惜しがるだろう——って言ったそうで」

「そんなことはどうでも構わない、出かけようか八。お静、羽織を出しな」

「有難い」

八五郎はすっかり有頂天になって、平次の先に立って犬っころのように雪道を飛びました。

## 二

山谷の東禅寺横、田圃と墓地を左右に見て、二三軒の寮と少しばかりのしもた屋が建っております。その中で一番洒落たのが佐野喜の寮で、左手は奉公人達が息抜きに来る別棟べつむねの粗末な離屋。裏には三四間離れて、植木屋の幸右衛門の家があり、南は田圃に開いた見晴しで、平次が行った時は道だけは泥濘ぬかるみをこね返してお

りましたが、田圃も庭も雪に埋もれて、みなみびさし南庇から雪消の雫ゆきげがせわしく落ちてゐる風情でした。

銭形が来るといふ前触れがあつたものか、番頭の万次郎は心得て門口まで迎えます。

「御苦勞様でございます。親分さん」

「三輪の万七兄哥が念入りに調べたそうだが、後学のために、俺もちよいと見ておきたい。仏様はどこだえ」

「へエ——、御検屍の御役人様方がこの雪でまだお見えになりますので、そのままにしてあります。どうぞ此方へ——」

万次郎は先に立って、狭いが確りした梯子はしごを二階へ案内しまし



た。こんな商売によくある、垢<sup>あかぬ</sup>抜けのした五十がらみ、月代<sup>さかやき</sup>も、手足もいやにツルツルした中老人です。

「フーム」

二階はたった一と間、唐紙の中へ入った平次は思わず眼を見張りました。六畳の半分をひたして血の海、その真ん中に贅沢な床を敷いて、主人の弥八は殺されていたのです。

「こんな恐ろしいことになりました。親分さん方」

番頭は部屋の隅にへたへたと坐って、死骸から眼<sup>そ</sup>を外らせませす。あまりの凄まじさに、正視出来ない様子です。

「主人はこの家に一人いるのか」

「いえ、お鶴という子供が一人、手廻りの用事を足して、この家に泊っております。夜が明けると、あちらの別棟べつむねから下女のお吉や、下男の音松が参りますが、御主人はせつかく寮へ来て休んでいるんだから夜だけでも静かな方がいいと仰しやるもので——」

番頭の話聴きながら、平次は念入りにその辺を調べました。主人は寝込んだまま、一刀の下にやられたらしく、脇差が喉を貫つらぬき、蒲団までも突き抜けて、畳へ切っ尖が達しております。

「大変な力だね、親分」

八五郎はちよつとその柄えに触つて舌を巻きました。

「まさか槌つちで叩き込んだんじゃあるまいな。柄頭を見てくれ」

と平次。

「何んともありませんよ」

金具には髪の毛ほどの疵もないところを見ると、やはり馬乗りになつて力任せに突き通したものでしょう。

「青梅綿の蒲団を二枚通すのはえらい力だな」

「こいつは天狗でなきや怨霊ですぜ、親分」

「馬鹿なことを言うな」

そうでなくてさえ、この春の火事には、延焼して来る火の手を

眺めながら、大金の掛つている十幾人の妓おんなに逃げ出されることを

惧おそれ、納戸に入れて鍵をかけたばかりに、三人まで焼け死ぬよう

な無慈悲なことをして、世間から鬼のように思われていた佐野喜の弥八です。怨霊に殺されたなどという噂が立ったら、その日のうちに瓦版が飛んで、来月は怪談芝居の筋書になるでしょう。

「戸締りは念入りだな」

「へエ——、主人は大層やかましく、申しました」

と万次郎。

平次は立って雨戸の工合を見ましたが、何んの変化もありません。尤も外からコジ開けるにしても、切立った二階窓で下からは

もつと

足掛りも手掛りもなく、隣の植木屋幸右衛門の二階窓とは同じ高さで向き合っておりますが、三間以上離れておりますから、羽が

なくては飛付く術すべもないわけです。

その隣との間の雪の上に、たった一箇所小さい穴のあるのは、上から物を放ったか、鳥が餌を探しにおりたのでしよう。手摺てすりの雪は雨戸を繰るとき大方払い落された様子です。

「脇差は誰のだい」

「主人の品でございます。用心棒の代りに、この二階の床の間に  
おいてあつた筈で」

そう説明されるとなんの手掛りにもなりません。

「ゆうべ主人の様子に変わったことはなかったのか」

「へエ——、別段変わったこともございませんでした」

「主人はちよいちよいい此寮へ来るのか」

用心堅固に口を緘つぐむ番頭の万次郎から、いろいろのことを引出すのは、相当の骨折ほねおりです。

「滅多に参りません」

「それはどういうわけだ、もう少し詳しく話くわしてくれ」

「お神さんがこの夏この寮で亡くなってから、あまり良い心持がなさいませんようで、一度もいらっしやいませんでしたが、近頃ひどく疲れたから、せめて二三日休みたいと仰しやって、きのう久し振りでお出でになりました。私はお供をして参りましたようなわけで、へエ」

「お神さんも、変死したのではなかったかい」

平次は佐野喜のお神さんが、春の火事で焼け死んだ妓共おんなの祟りたたで自殺したという噂のあったのを思い出しました。

「へエ——」

「それを詳しく聴こうじゃないか。ね番頭さん、お前さんはたいそう用心しているようだが、前後の経緯いきさつを詳しく話してくれないと、罪のないものが罪を被ることになるよ、——これは物の譬だが、あの大雪の中を忍び込んで、この二階へ迷いもせずに登って来た上、これだけの恐ろしい力で主人を刺せるのは、よく案内を知った男だ」

「へッ」

万次郎は胆を潰しました。疑いは真つすぐに自分を指していることに気が付いたのです。

「どうだ、隠し立てなんかせず知っていることは皆んな話して見ちゃ」

「申します、親分さん、——お神さんは、この夏の末普請ふしんが出来上ってホツとしたから、骨休めがしたいと仰しやっつて、この寮へ来て泊った晩、急に気が変わったものか、下の部屋の梁はりに扱帯しごきを掛けて首を吊つて亡くなりました」

「その時は誰が一緒だったんだ」



「私は参りません。離屋の方に下女のお吉と下男の音松が泊り、

この寮にはやはり小女のお鶴がおりました」

「たしか確に自殺だったのか」

「間違いはございません。三輪の親分さんも、御検屍のお役人様方もそう仰しやいました」

「そのお鶴というのに逢って見よう」

「呼んで参りましょうか」

「いや階下へ行こう」

平次とガラツ八は、狭い梯子を踏んで下に降りました。そこは

店の方から駈け付けたらしい人間で調べも何も出来ないほど一

ばいです。

「皆んなにしばらくの間、向うへ行つて貰おうか」

その人数を別棟の方に追いやつて、平次は小女のお鶴を呼出しました。

三

「お前はお鶴というんだね」

「へエ」

「怖くなかつたかい」

「――」

平次の調子があまりに穏かなのと、その言葉の奥に優しく慰いたわる響があるので、お鶴はびつくりして顔を挙げました。お鶴の想像していた御用聞がいねんという概念とはおよそ心持の違った平次です。

十四五にもなるでしょうか、なんとなく目鼻立の悪くない方ですが、発育不良らしく痩せ衰えた上小柄こがらで青白くて日蔭に咲きかけた雑草の花のような感じのする小娘です。



©2017 萩 柚月

「お前の親許はどこだ、——幾つで何年奉公している」

平次は一ぺんに三つの問いを投げかけました。

「川崎在でございます。二年前十三の時、十九になる姉と二人で奉公に参りました」

お鶴の答えの要領のよさ。

「姉はどうした」

「この春の火事で亡くなりました」

「そうか」

泣き出しそうなお鶴の顔を、平次は憐れ深く見やりました。たぶん姉妹二人、よくよくの事情で女衞ぜげんの手に渡り、年上の姉は佐

野喜の店で勤め、年弱で身体も萎いじけきつている妹のお鶴は、寮の下女代りにこき使われていたのでしよう。

「姉が死んで口惜しいと思わないのか」

「口惜しいと思いましたが——でも」

弱くて若い女の子に、それがどうなるものでしょう。お鶴は口惜しさも涙も隠そうともせず、俯うつ向いて前掛に顔を埋めるのです。

「両親はないのか」

「父親は五年前に亡くなり、母親は病身で親類の家に厄介になつております」

平次はすっかり考え込んでしまいました。この日蔭で干し固め

たような少女には、弥八を殺す動機がないとは言えません。

「主人はお前によくしてくれたのか」

「――」

「給料はいくらだ」

「――」

お鶴は黙って頭を振りました。因業佐野喜は決して結構な主人でなかったことはよく解ります。

「ゆうべ皆んな別棟べつむねに引揚げたのは何刻だ」

「お吉さんが引揚げたのは戌刻いっく（八時）頃で、番頭さんはそれか

ら間もなく引揚げました。雪の降り出す前で――」

「それつきり寝てしまったのか」

「は、いえ、あんま按摩さんが来ました」

「どこの按摩で、何んという」

「玉姫の多の市という人で、よくこの辺を流して歩きます。御主人様が昼のうちに往来で逢って約束なすったそうよっはんで、亥刻半（よっはん一時）頃雪が降り出してからいきなり入って来ました」

「揉もませたのか」

「遅いからもう止そうと断りましたが、多の市さんは依い怙こじ地な方で、こんな大雪にわざわざ来たんだからと、無理に入り込んで――」



「二階へ上がったのか」

「いえ、階下の八畳で一寸揉ちよつとんで貰いました」

「帰ったのは？」

「すぐ帰りました。子刻このつ（十二時）前だったでしょう」

「それから」

「御主人は二階へ行ってお休みになりましたし、私は階下で、何時ものように休みました」

「二階へは有明ありあけを灯けておくのか」

「油が無駄だからと仰しゃって、いつでもすぐ消します」

佐野喜の主人ともあろうものが、有明の種油を惜しむというの

は、ちよつと常人に思い及ばないことです。

「ゆうべ主人は酒を呑まなかつたのか」

「晩の御飯のとき二合くらい召し上りました」

「そんなことでよかろう。ところで今朝の様子を話してくれ」

平次は話頭を軽く転じました。

「朝起きて見ると、お勝手口の戸が開いていて、外には大きな足跡が付いていました」

「たしか確に戸は開いていたに違いあるまいな」

「え、——寒い風が吹込んでいました」

「八、雪の降り出したのは、何刻どきごろだえ」

平次は八五郎を顧みかえりました。

「戌刻いっつ(八時)時分から降り始めて、夜中にひどくなりましたよ」

「降り止んだのは」

「大降りだった割りに早く霽はれたようですね。牡丹雪ぼたんゆきで二た刻ば

かりの間にうんと積ったんでしよう、寅刻ななつ(四時)前に小用に起

きた時は、小降りになってましたよ」

「すると、下手人は寅刻ななつ(四時)近くに出て行ったわけだな、――

――その足跡には雪が降っていなかっただのか」

「え」

「お勝手口は締め忘れたのか、それとも外からコジ開けたのか」

「三輪の親分さんは、鑿のみか何んかでコジ開けたに違いないと言いました」

お鶴がそう言うまでもなく、お勝手の雨戸にも敷居にも、大きな傷のあることは、その間に家中を嗅ぎ廻っている、ガラツ八もよく見窮みきわめておりました。

#### 四

つづいて下女のお吉を呼んで調べましたが、大した役に立ちそうなお事はありません。

「何んにも知りましねエよ。けさお鶴さんに騒ぎ出されて、びつくりして飛んで行つただ」

三十二三のお吉は働くのと溜める外には興味のありそうもない、恐ろしく頑丈な醜女しこめです。

佐野喜へ奉公に来て六年目、平常ふだんは店の方において、主人が寮へ来るときだけ付いて来るそうで、何を訊いても一向筋が通りません。

「主人を怨んでる者があるだろう。お前の知っているだけの名前を言つて見な」

「皆んな怨んでるだ。私は給料が少くて仕事が多いし、番頭さん

は朝から晩までガミガミ言われるし、音松爺さんは六十八になるが、国へ帰して貰えそうもないし、お鶴は姉の百代ももよさんが焼け死んだし、勝太郎さんは嬉し野さんが死んだし——」

お吉は水仕事で太くなつた指を折って、こう勘定するのです。全く際限がありません。

「近頃主人にひどく叱られた者はないのか」

「毎日目の玉の飛び出るほど叱られるから、慣れっこになつて驚かないだよ」

「けさの騒ぎのときお鶴が離屋はなれに迎えに来たのか」

「いえ、大きな声をしたから驚いて駈け付けただ」

「お前が行くとき、雪の上に足跡があつたかい」

「あつたようだよ」

それ以上はこの女の粗笨そほんな記憶を引出す術すべもありません。

「店中はともかく、世間の人皆んな主人を怨んでいるわけじゃあるまい」

「そうだよ」

「一人くらいは怨まない者もあるだろう」

「お隣の幸右衛門親方だけは、ひどく有難がつているよ」

「それはどういうわけだ」

「娘のお歌さんの親許みうけ身請みうけのとき、唯みたいにあくして貰ったん

だつてネ」

お吉の話によると、植木屋幸右衛門はもと鳥越で大きく暮して  
 いたが、悪い人間に引つ掛つて謀判ぼうはんの罪に落されそうになり、身しん  
 上しょうを投げ出した上娘のお歌まで佐野喜に売つて、ようやく遠島は  
 免まぬれましたが、その後お歌の歌川が病氣になり、勤めもできない  
 身体になつたのを可哀想に思つて、ひどい苦面で親許身請をし、  
 この寮の隣の二階屋を借りて養生をさせましたが、重い癆咳ろうがいでと  
 うとう去年の暮死んでしまつたといふのです。身売の時も知合  
 の佐野喜が思いきつた金を出してくれ、病氣で親許へ帰る時は、  
 世間の相場で三百両も五百両も積まなければならぬ歌川を、



たった五十両で帰してくれた恩を、幸右衛門は今でも身に沁みて有難がっているというのでした。

「その幸右衛門は来ているのか」

「第一番に飛んで来て、いろいろ手伝っていたが、先刻帰ったよ  
うで」

その次に平次は、下男の音松に逢って見ました。それはもう六十八という老人で、腰も曲り、齒も残らず欠<sup>か</sup>け落ち、ぼん<sup>、</sup>の<sup>、</sup>く<sup>、</sup>ぼ<sup>、</sup>に少しばかり白髪<sup>まげ</sup>の鬚<sup>まげ</sup>が残っている心細い姿ですが、多年の労働で鍛<sup>きた</sup>えた身体だけはなかなか頑丈らしく、耳さえよく聴えたら、相当役に立ちそうな親爺<sup>おやぢ</sup>でした。

給料の前借があるので、主人がなかなか川越在の田舎へ帰してくれないのが不平のようですが、それを除けば大した文句もないらしく、結局少女のお鶴とたった二人で、滅多に人の来ない寮の番人をしているのが、反って気楽そうでもあります。

朝からのことを一と通り話させると、

「いや驚きましたよ。何しろ私共のいるところからこの母屋まで、おもや五六間のところに大きな足跡が付いているんでしよう。お鶴が気が違ったように騒ぐから、二階へ上がって見るとあの始末だ」

「第一番にどんなことをした」

平次は爺やの耳元で声を張上げました。

「町役人とお店と医者へ行かなきゃならないから、まず隣の幸右衛門さんのところへ飛んで行って手伝いを頼みました」

「幸右衛門はまだ起きてなかったのか」

「平常ふだんは恐しく早い人だが、大雪の朝は寝心地が良いから、今朝にかぎって大寝坊だ。戸を叩いても容易に起きないのには弱りましたよ」

「幸右衛門の家から出るか入るかした足跡はなかったのか」

平次の気の廻ること——、ガラツ八はそれを聴きながら固唾かたずを

呑みました。

「雪の中の一軒家のように、犬っころ一匹側へ寄った足跡もねエ。

五寸以上の雪だから、たった五六間歩くのに、足駄がめり込んで弱ったね」

意味もなく語りつづける音松老人の言葉は、植木屋幸右衛門を遠く嫌疑の外へ追い出してしまいます。

「往来からすぐこの寮へ来た足跡はなかったのか」

「ありませんよ。尤も往来からもつと俺たちの休んでいる離屋はすぐだから、軒伝いに廻って来て、母屋のお勝手へ入れば別だが」

音松の説明は、全く他の者——例えば勝太郎のようなものでも、寮へ来ることの可能を証拠立てます。

「お勝手にあった足跡は足駄か草履か、それとも——」

「そこまで判らねえ、でも何んか齒の跡が見えたように思うが――」

はなはだ覚束おほつかない言葉です。

## 五

平次とガラツ八は、隣の植木屋幸右衛門の家へ顔を出しました。

「親方、飛んだ迷惑だネ」

平次はお世辞ものです。何にか昔馴染の家へ遊びにでも来たよ  
うな心置きなさ――。

「へエ——、錢形の親分さんだそうで、御苦労様で」

「俺の来ることが大層早く判ったんだね」

「お鶴坊がそう言って教えてくれましたよ。江戸で高名な錢形の親分さんがいらっしやると——」

「ハッハッ、そいつは丁寧過ぎて謝った。ところで親方、ゆうべは何んにも物音を聞かなかったかえ」

「何んにも知りませんよ。あれ程の騒ぎがあったんだから五間と離れない私の家へ聞えない筈はないんですが、一杯飲んで寝たのと、大雪のせいでしょう。雪の降る晩というものは、不思議に物音が聞えないものです。同じ屋根の下でも階下に寝ていたお鶴

坊が知らないくらいですから」

静かな調子と重厚な感じの物腰が、この中老年人をひどく穏かにします。中老年人といつても佐野喜の主人と同年配の、せいぜい四十七八でしょうか、もとはよく暮したというのが本当らしく言葉の調子にも、身のこなしにも、何んとなく品格の匂う人柄でした。

「ところでお前さんたった一人で暮していなさるのかい」

「へエ——、悪い月日の下に生まれましたよ。女房に死なれた翌年、騙かたりに引掛つて身上を仕舞い、その二年後には娘に死なれたんですから。天道様を怨む張合いもありません」

幸右衛門は長い眉を垂れました。この上もなく静かですが、動

乱する心の中の悲しみは平次にもよく解ります。

「佐野喜を怨む筋はなかったのかい」

「最初は良い心持ではございませんでした。納得して金に換かえた娘でも、親から見れば買い手が怨うらめしくなります。でも、二年目に病気になると、たった五十両で親許に帰してくれました。半年前に三百両で身請け話のあつた娘です」

「成程な」

「それから、お隣に住むようになって、寮へいらつしやるたび毎に、何彼につけてお世話になりました。うまい物があれば届けて下すつたり、良い医者があるとわざわざ差向けて下すつたり、で



も寿命のないものはどうすることも出来ません。長いあいだ患わずらつた揚句、親父の私をたった一人この世に残して去年の暮に亡くなつてしまいました」

娘のことというと夢中になるらしい幸右衛門は、相手の身分の忙しいのも構わず、すっかり自分の述懐おぼに溺れきるのでした。

平次はそんなことで打ち切つて、

「この家の二階から、寮の二階を見せて貰いたいが——」

「へエ、どうぞ」

自分で先に立って二階に上がると、幸右衛門は窓を開けて何んのこだわりもなく平次に見せました。

窓と窓との間は三間あまり、飛付くことなど思いも寄らず、締めきつて大雪が降っていたから、向うの物音が聞えなかつたというのも無理のないことです。

「八、向うの窓へ物干竿か、丸太を渡して歩けるかい」

平次は冗談らしく窓の下に立てかけた、植木の突っかい棒にする商売用の丸太を指しました。

「御免蒙りましょう、三足と歩かないうちにグラリと行きますよ。それに、丸太は二三十あるが、向うの窓に届くような長いのは一本もないし、一パイ雪を被って、引っこ抜いて使ったあともありますぜ」

「物の譬だ、——そんな手もあるまいという話さ。なあ親方」

平次は後に立って、酢っぱい顔をしている幸右衛門を顧みまかえりした。

それから念のため家の中と外廻り、隣との関係を見せて貰って、外へ出ると、

「ところで八、あの番頭の身持と店中の評判を訊いて来てくれ」  
平次はいきなりこんなことを言います。

「あの番頭は虫の好かない野郎じゃありませんか、あれが臭いんでしょ」

「そんなことは追って解るよ、——それから玉姫の多の市という

按摩あんまに逢つて、ゆうべの様子を訊くんだ。盲目めくらはカンが良いから、佐野喜の主人の身体を揉んでいるとき、何にか変なことがなかつたか、曲者が忍んでいるとか、——主人が變つたことを言つたとか」

「それだけで？」

「それで沢山だ——俺は三輪の兄哥に逢つて訊きたいことがある。頼むよ八」

「合点」

八五郎は踵かかとに返事をさせるように、もう飛出しております。

## 六

番所へ顔を出すと、三輪の万七とお神楽かぐらの清吉は、自分たちの手柄に陶醉して、すっかり好い機嫌になっておりました。

「お、錢形の。兄哥が来たという話は聴いたが、とんだ無駄足で気の毒だったな」

万七の鼻は蠢うごめきます。

「様子を見に来たんだか、——やはり勝の野郎が下手人だったのかい」

「まだ白状はしねえが、お白洲しらすで二三束打たれたら他愛もあるめ

えよ」

「証拠があるんだから文句は言わせねえ心算つもりさ。東禅寺前で夜泣蕎麦そばを二杯も喰っているし——」

「刻限は」

「雪がチラリホラリ降り出した頃だというから、亥刻よつ（十時）少し前だろうよ。それから雪に濡れた草履が自分の家の縁の下に突っ込んであったし、手拭と袴を妹のお糸くめが火鉢で一生懸命乾していたのさ」

「草履？」

「真新しい麻裏だよ。——雪の降る前に飛出して、大降りになっ

てから帰ったんだろう」

「そいつは飛んだ間違いだ、もういちど念入りに調べ直してくれ。下手人は勝の野郎じゃないよ、兄哥」

と平次。

「何んだと、銭形の、——まさか俺の手柄にケチを付ける心算じゃあるまい」

「飛んでもない」

「それじゃ手を引いて貰おうか。勝は八五郎の下っ引だったから、銭形の息は掛ってるだろうが、証拠のあるものを放って置くわけには行かぬエ」

三輪の万七は屹きつとなりました。平次に対する反感で、逞たくましい顔がサツと青くなります。

「証拠？」

「勝は夫婦約束までした嬉し野が焼け死んでから、ひどく佐野喜を怨んで、折があつたら仇を討ってやると、友達中に触れ廻り、腹巻には何時もあいくちヒ首を呑んでいたそうだ」

「殺した道具は脇差だぜ」

平次もさすがにムツとした様子です。

「手当り次第にやったのさ、ヒ首より脇差の方が都合がいい」

「真つ暗な二階で、よくそんな贅沢な道具を見付けたことだ。――



「ね、三輪の。俺は兄哥と張り合いに来たんじゃねエ。どう考え  
ても勝の野郎のしたことじゃないから、ツイ飛込んでお節介をし  
たまでのことだ。お願いだからもう一度調べ直してくれ」

平次はもう一度下手に出る気になつたのです。が、三輪の万七  
は子分のお神楽の清吉の見ている前もあり、そう簡単には打ち解  
けそうもなかつたのです。

「存分に調べたよ、この上調べようのないところまで調べたよ。  
それで勝をしょつ引いたが何うしたんだ」

「弥八が殺されたのはどう考えても亥刻半よっはん（十一時）過ぎだ、  
——下手人らしい足跡に雪が降っていなかつたそうだから、引揚げ

たのは夜明け近くだろう。勝が山谷にブラブラしていたのは、亥<sup>よ</sup>刻<sup>っ</sup>（十時）そこそこだというじゃないか」

「それから曉方過ぎまでいたとしたらどうだ」

「あの大雪の中に一と晩立っていたのか」

「寮の中にいる術<sup>て</sup>もあるよ」

万七は頑<sup>がん</sup>として譲りません。

「それに、下手人の残した足跡は、足駄か高下駄だが、勝は草履をはいていたというじゃないか」

「穿<sup>は</sup>きかえたらどうする」

「まあいい、兄哥の言うのが皆んな本当として、——人を殺しに

行く者が、夜泣蕎麦そばを二杯も喰えるだろうか」

「胆の据った野郎だ。呆れ返っているよ」

これでは手のつけようがありません。平次は尻尾を巻いて引退るより外はなかつたのです。

「そう言わずに兄哥」

「気の毒だが勝は口書を取ってお係りに引渡すばかりになつて  
いるんだ。助けたかつたら、真物の下手人を挙げて来るがいい。  
銭形のお手際を拝見しようじゃないか」

万七は子分の清吉を顧みてニヤリとしながら、自棄やけに煙管を  
引っ叩きます。

平次は悄然として外に出ました。八五郎の面目のために勝太郎を救う工夫は容易につきそうもありません。

田圃の勝床を覗いて見ると妹のお糸は浮かぬ顔くめをして客を断っております。

「あ、錢形の親分さん」

「お糸、気の毒だなア」

「親分さん、兄さんは矢張り——」

「むつかしいなア」

「どうしまししょう、私」

お糸は手放して泣き出すのです。十九かせいぜい二十歳でしよ

うが、勝気らしい下町娘も、たった一人の兄が、人殺しの下手人で縛られてはひとたまりもありません。

「お前がなまじつか隠し立てしたのが悪かったんだ。潔白なものなら何にも細工などをすることはない、——勝はやはりゆうべ山谷へ行つたんだらう」

「え」

お糸はようやくうなずきました。

「帰つて来たのは何時だ」

「雪が降り出してから——亥刻よっ（十時）少し過ぎでした」

「亥刻半（十一時）前に帰つたことが判れば、勝は下手人じゃな

い。証拠があるか」

「私が――」

「お前では証人にならない。誰か知ってる者はないのか」

「さア」

お糸はハタと困った様子です。

それからいろいろと訊ねてみましたが、勝太郎を救うような手掛りは一つもありません。この上は、三輪の万七が挑戦したように、勝太郎以外の下手人を縛って突き出す外はなかったのです。

「親分、今帰りましたよ。あ、腹が減った」

ノソリと帰って来た八五郎は、火鉢の側へ膝行<sup>いざ</sup>り寄ると、もうこんなことを言うのです。

「色気のない野郎だな、頼んだ仕事の方はどうだ」

「上々吉ですよ、その代り腹が減ったの減らねえの——」

「何がその代りだ」

「助けると思つてまず五六杯詰め込まして下さい。頼みますよ」

八五郎の望<sup>のぞみ</sup>に任せて、お静は膳<sup>こしら</sup>を拵<sup>こしら</sup>えてやりました。

「何しろ、あれから働きずくめで、水を呑む隙もねえ」

「能書はそれくらいにして、どんなことがあったんだ」

「佐野喜へ行つて、番頭の万次郎のことを訊くと、いやもう滅茶滅茶。奉公人どもは主人の悪いところは、皆んな番頭の入れ知恵だと思ひ込んでいやがる」

「で？」

「店の金だつて、どれだけくすねているか解つたものじゃありません。万次郎の荷物を調べて見ると、盗み溜めたらしい金が何んと三百両も隠してあるんだから驚くでしょう」

「それから何うした<sup>ど</sup>」

「どんな顔をするか見てやろうと、荷物をもとのままにして、山



谷の寮から万次郎を呼び返して見ましたよ。すると」

「――」

「店へ帰るといきなり、用事を拵えて自分の部屋へ入り、くすねておいた三百両のうち二百両まで持ち出して、店の金箱へ返すじゃありませんか。稼かせぎ溜めた金なら、そんなことをする筈はない」

ガラツ八もなかなかうまいことに気が付きます。

「それから何うした」

「下っ引を呼びよせて、万次郎を見張らせ、あつしは玉姫の多の市のところへ行きましたよ。すると恐しい働き者で陽のあるうち

から留守だ。仕方がないから行く先々を捜し廻って、按摩の笛の音をしるべに、ようやく捉つかまえたのは日が暮れそうになってから、——腹も減るわけじゃありませんか」

「無駄が多いなア、多の市は何んと言った」

「何んにも言やしません。あの家は年に二三度ずつお神さんを揉みに行つたきりで、主人を揉んだのは昨夜が始めてだそうで、お神さんは療治代の十二文の外に一文もくれたことがないが、主人はさすがに豪儀だ、黙って二百くれたということだ——」

「それつきりか」

「へエ」

「佐野喜が按摩あんまに二百文も出すのはどうかしていると思わないか、——俺が行つて見よう。多の市に逢つたら、何にか変つたことがあるかも知れない」

「これから行くんですか、親分」

「まだ日が暮れたばかりだ。できることなら、勝の野郎を番所へ泊めたくねえ。お前は疲れているなら、ここで吉左右を待つがい」

平次は手早く仕度をして立ち上がります。

「冗談でしょう、あつしが行かなかつた日にや勝の野郎に済まね

エ」

ガラツ八は熱い番茶をガブリとやると、口の中に火傷やけどをしながらもう足駄を突っかけております。

按摩の多の市を捜すのは、全く容易の業ではありませんでした。ようやく田町を流しているのを突き留めて、蕎麦屋そばへ入って一杯吞ませながら聴くと、十手より酒精アルコールの方が利いて、思いの外スラスラと話してくれました。

「佐野喜の主人は酒を呑んでいなかっただのかいと平次。

「へエ、酒の気もありませんでしたよ」  
多の市の答えはまず予想外です。

「何にかものを言つたらう」

「何んにも言わないから少し向つ腹が立ちましたよ。世の中には無愛想な人間もあるものだが、あんなのはありません。尤も二百も祝儀を出しや、石地藏を揉んだって腹は立ちませんがね」

「あのお鶴という小さい娘が取次いだのかい」

「へエ」

「療治の間主人は眠つてでもいたのかい」

「飛んでもない、心臓が悪い様子で、大変な動悸どうきでしたよ」

「外に何にか不思議に思ったことはないのか。揉んでいて何にか物音が聞えるとか、他の人間の気はいがするとか」

「そう言えば、佐野喜の主人ともあろうものが、お召物がひどく粗末でしたよ」

「それつきりか」

「もう一つ、あの人はもと職人か百姓をしたことがあるでしょうか、手がひどく荒れていましたか」

「フーム」

平次は深々とうなずきました。

## 八

「来いッ八」

「どこへ行くんで、親分」

「下手人げしゅにんが判った」

「番頭の万次郎ですか」

「いや、主人を殺すくらいな奴が、後ろ暗いことをしている筈はない。——お前に店へ呼び戻されてからあわてて銭箱へ二百両返すようじゃ、あの番頭は悪い奴だが人殺しはしなかった」

「じゃ誰です、親分」

「今に判る」

平次とガラッ八が山谷へ行った時は、寮はお通夜でゴタゴタし

ておりました。

「八、提灯を用意して来い」

「へエ——」

離屋へ行つて提灯を借りて来ると平次は八五郎とたつた二人で植木屋の幸右衛門の家へそつと入つて行つたのです。

「何にをするんで、親分」

「探す物があるんだ」

「——」

平次はいきなり二階へ入ると、窓の張出しと手摺てすりを見ました。

が、よく拭き込んで何んにもありません。隣の寮はお通夜のお経



が始まったらしく閉めきった中から陰気な読経の音が漏れます。

「これだ」

平次は勝ち誇ほこった声を挙げました。窓の下、畳の上に僅かばかり残った鋸屑おがくずを見付けたのです。

「鋸屑じゃありませんか」

「そうだよ、もう一つ捜すものがある」

階下へ降りて念入りに捜し廻ると、縁の下へ深く抛り込んだ切口の新しい一間ばかりの丸太が四本。

「占めたッ、もう大丈夫」

喜び勇む平次の眼の前に、何時どこから入って来たのか、植木

屋幸右衛門が、しょんぼりと立っているではありませんか。

「恐れ入りました、親分さん。勝さんが縛られたと聞いて自首して出る心算つもりでしたが、ツイ未練で遅れてしまいました。私を縛って下さい」

ヘタヘタと崩折れると、両手を後ろに廻してうな垂れるのです。  
「幸右衛門、——何んだってもう少し早く名乗って出なかつたんだ」

「一言もごさいません。命が惜しかったのです、——親分さん、——この私でなく、若い者の命が——」

「よしよし、神妙の至りだ。お上にも御慈悲がある、——ところ

で、何んだって、弥八を殺す気になったんだ」

「今朝申上げたのはあれは、皆んな嘘うそでございます。私の娘のお歌は、弥八夫婦にいじめ殺されました。身体の弱い者に、無理な勤めをさせ、少しでも休むと、物も食わせないばかりか、犬畜生にも劣おとった折檻をされ、とうとうもう助からないという大病人になつてしまいました」

「――」

「そうになると、助からない病人の世話をして葬とむらひいを出すのが馬鹿馬鹿しくなつて、私に五十両という大金を苦面させて、死骸同様の娘を無理強いに親許身請をさせ、万一丈夫になつた時は、二度

の勤めをさせるといふ証文しょうもんまで取つて、ときどき医者いしやをよこしました。鬼と言おうか、蛇と言おうか、あんな恐しい人間はありません。娘はそれを怨うらみつづけて血を吐きながら死んでしまいました」

そう語りつづけるうちに、幸右衛門は燃え上がる忿怒のやり場もなく、唇を噛み、拳を握つて、はふり落ちる涙を横撫でに払うのでした。

「この夏お神さんの死んだのは——お前のせいではあるまいな」と平次。

「あれは全くの自害でございます。寮へ来て、あの窓から私の家

の二階を見ると、さすがに娘に濟まないと思つたのでしよう。夜中にフラフラと死ぬ氣になつた様子です。——娘の怨みだつたかもわかりません。——ところが主人の弥八はますます丈夫で、三人も妓おんなを焼き殺しても、虫を踏み潰したほどにも思いません。昨日などは私の顔を見ると、いきなり、お前の娘のお蔭で、大損をしたと喰つてかかる有様で——」

幸右衛門の憤激は果てしありません。

「で、昨夜、雪の降る前に寮に忍び込み、弥八が酔つて寝たのを見すまして、二階で刺したのだらう。——帰ろうとすると按摩の多の市が来た。断つても依怙いこじ地で帰らないから仕様事なしにお前

が弥八の代りに揉んで貰って、何んとはなしに口止めの心算で二百はずんだ」

「――」

平次は描いて行く事件の段取りは、実際と寸毫すんごうの喰い違いもありません。幸右衛門は口を開いて聞き入るばかりです。

「帰ろうとしたが、ちょうど大雪が降っていて、足跡を隠しようがない。幸いお前が手掛けた寮の植木の突っかい棒にする長い丸太が、寮の二階窓の下に立てかけてあったのを思い出し、そこから丸太の尖につかまって、三間も離れている自分の家の二階の窓まで飛付いた。危い離れ業わきだが、それでもお前は高い場所の仕事

に馴れているから、どうやらこうやらうまく行った」

「――」

平次の推量の素晴らしさ、幸右衛門は自分のした事を復習されて、ただ呆気にとられるばかりです。

「自分の家の二階へ帰ったが、四間以上もある丸太をそのままにして置くとたちまち露見する。お前はそれを二階へ引入れて、四つに切り落し、縁の下に抛り込んで素知らぬ顔をしていた。二階から二階へ丸太で橋を架けるかことは俺もすぐ考えたが、丸太を大地に立てて、二階から二階へ飛付くことは考えなかったよ」

「恐れ入りました親分さん。その通りに違いございません」

幸右衛門は板敷の上へ両手を突きます。

「ところで、雪の降る前にお前を誘い込んで、夜中過ぎ大雪になつてからお前を送り出し、窓を締めたり、お勝手口へ足跡をつけたりした人間がある筈だ」

「それは親分さん、勘弁してやって下さい。姉を焼殺された上、自分は牛馬のようにこき使われている可哀想な娘です。娘の母親は遠い親類の厄介になつて、生きるに生きられず、死ぬに死なれぬ目に逢っていると、この間も手紙が来たのを見て、私も貰い泣きをしました。——あの娘はただ戸を締めて、足跡をつけただけです。たった十五になつたばかりの娘が、姉の仇を討つ氣にでも



ならなければ、そんなことができずわけはありません。お見逃しみのがを願います、親分さん。弥八を殺した下手人は私一人で沢山でございます」

幸右衛門は幾度も幾度も顔を床に摺り付けました。

「よしよし、何んにも知らなかったことにしよう。それから、俺に縛られたんじゃ、お前の命を助けようはない。見え隠れに八をつけてやるから、すぐ番所へ駆け込みうったえをしろ、お係り同心が出役になっている筈だ。——俺に言われたなんて、間違っても言うなよ。佐野喜の主人にはお上の憎しみがかかっている。御慈悲でお前の罪が軽くなれば、遠島か永牢で済むかも知れない、

そうするとまた娑婆へ出て来る折もあるだろう。——あの娘のことは心配することはない、俺が引受けて母親のところへ届けてやる」

「有難うございます。親分さん、神とも仏とも、——」  
五十近い幸右衛門は恥も体面も忘れて大泣きに泣き入るのです。

隣の寮のお通夜の経はようやく済んだらしく、ザワザワと波立つような人の声が聞えます。

それを聴いたガラツ八の八五郎は、薄暗いところに引込んで、やたらと拳固で涙を拭くばかりでした。

平次の手柄に代えて幸右衛門は、佐野喜の主人の段々の不都合が知れて、下手人ながら江戸追放という軽い裁きさばを受け、平次が預かっているお鶴をつれて、川崎在のお鶴の母を訪ね、そのまま土着して安らかに暮しているということでした。これはずっと後の話。この胸の透すく事件のお蔭で平次は手柄も褒美もフイにしましたが、その代りガラッ八と一緒に呑んだ正月は近年にない明るいものでした。

(編注)

作品中には、身体障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

夜の雪

初出―「オール讀物」昭和十六年一月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第六卷  
河出書房 昭和三十一年七  
月三十日初版

編集・発行 錢形俱樂部



# 錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>